青年期の舞踊作品題名に関する研究

寺山由美（筑波大学大学院）
西森珠貴（高岡短期大学）

研究目的

本研究は，1964年から1996年のＴ大学ダンス部公演の作品題名を分析し，青年期の作品題名が，時代と共にどのような傾向をたどってきたかを明らかにしようとするものである。

研究方法

Ｔ大学ダンス部が，年に一度開催している，ダンス公演の為に創作された作品について，先行研究1),2)の手法を用いて分析した。すなわち，題名を単一語題と複合語題に分け，題名用語を自然から思想感情にわたる15領域に類別した。さらにそれを，年代別に分類した。

研究対象作品数は，236作品である。また，対象作品の創作者は大学１年～４年生であり，時代のなかで，青年期という発達の時期を共通属性としている。ダンス部の構成状況として，半数近くが大学からダンスを始めた者であるため，作品創作の経験が少ない，もしくは初回であった。

結　果

1.題名の表現傾向

各題名を，単一語源，複合語源に分類すると，全体236作品中における単一語源は，112作品（47%）であり，複合語源との割合はおよそ５：５となる。これは，先行研究1)の中学・高校の舞踊作品の場合は，単一：複合＝６：４と報告され，先行研究2)の舞踊家の作品においては，単一：複合４：６と報告されていることと比較すると，双方の中間の立場である。

2.題名用語の選択傾向

１）語題別選択傾向

単一語題，複合語題別選択順位をみると，単一語題では，「思想感情」…18%，「抽象概念」…16%，「自然」…12%であった。複合語題では，「抽象概念」…22%，「自然」および「行動」…各12%，「人と身体」および「思想感情」…各10%，全体の摘出頻度では，「抽象概念」…38%「思想感情」…27%「自然」…24%となっている。

この結果は，先行研究において中学・高校，舞踊家と「自然現象」の領域が１位だったのに対し，大学生は「抽象概念」，「思想感情」が上位を占めている。

２）年代別にみられる選択傾向

年代別に選択傾向を見ると，「思想感情」，「抽象概念」は，近年，顕著に増加している。さらに，年度でみると，1985年を境に，増加傾向を示している。

３）「その他」の領域（15領域目）

分類不可能な「その他」の領域（15領域目）に含まれた題名として，「こんなはずジャー」「お・し・り・あ・い」のような洒落を用いたもの，「新岡千雪」といった作者名や固有名詞を題名に用いたもの，また，「ルルルル　ラララ」のような擬音を用いたものなどがあげられる。この領域の75%は，1983年以降に出現している。

４）自己概念用語の選択傾向

英訳すると「Ｉ」「my」「me」「mine」となる語題を，自己概念用語の選択基準とした。その選択傾向は，全体の７%である。現代舞踊展出品題名と比較すると，こちらは１%である。このことから青少年期には，自己概念用語の選択傾向が高いと言える。

ま と め

以上の結果から，考察として以下のことが言える。

(1)「自然現象」より「抽象概念」の摘出頻度が高いことは，大学生の抽象的思考を肯定する結果と言える。松本は，高校生の「抽象概念」の値が高いことから，「高校期の抽象的思考」を指摘しているが，大学生では，さらにこの傾向が強いことを示唆していると考えられる。

単一語源，複合語源の割合からも，大学生が先行研究の対象者の中間の立場であり，年齢の流れと選択傾向は関連していると考えられる。

(2) 高度成長期の1985年から，「抽象概念」，「その他」の題名用語の選択傾向が増加している。このことから①作品内容の不明確さ，②新しい奇抜な発想をする，③遠回しな表現（露骨さを避ける）を好む傾向が考えられる。

(3) 自己概念用語の選択傾向から，青年期の自我形成期には，自己に，より強い関心があると考えられる。

引用・参考文献

１）松本富子，桑原淳子（1988）　舞踊作品題名に関する研究―中学生・高校生における舞踊主題とその選択傾向―。群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編23：103－124

２）徳家雅子（1978）　舞踊主題に関する研究（その２）題名分析。　武庫川女子大学紀要　26：21－33